羣書類從

百六十七下

和書門
類 九五九五 號
二四 函
四 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書
類 九五九五 號
六七〇 冊
二四 函
一六 架

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670 (226)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第百六十七下

検校保己一集

和歌部九二百首一

堀川院御時百首和歌 補左郎百首 康和年中

題

冬十五首

初冬　時雨　霜　霰　雪

寒芦　千鳥　凍　水鳥　網代

神樂　鷹狩　炭竈　爐火　除夜

戀十首

帝室圖書寮

帝室圖書寮

初恋　不被知人恋　不逢恋　初遇恋　後朝恋
遇不逢恋　旅恋　思　片思　恨

雑二十首

暁　松　竹　苔　嘉
山　河　野　関　橋
海路　旅　別　山家　田家
懐舊　夢　無常　述懐　祝詞

冬十五首

初冬　春宮大夫公實

ふるとても秋はなほまつ山のまに出ぬ月のうらもとぞなる

右田川秋のこまりとみそなはすふるさとはらふ人もなしとて

権中納言國信

かみな月まつそうまとせぬ紙とうもあらぬ人作もあらぬ人作なる

右云来書師頼

冬ふる里はさこそ雪をうれしけれ神代の花をたづねてはなる

修理大夫孝季

さきのまへのあたんさうと小男所をそこせけさ[illegible]

右京大夫藤仲

かさ[illegible]ろうもれるろ誠路はいそうろふをみそこそろん

中宮權大進仲實

いそみ川ふたたびこの姫けふふをまもあみてさそふをと

右工藤俊頼

いうくのうと秋始おとおうあまけさハ水楽にあるとうしハ

右近權少將師時

野へうりわみそハうん者花にそ白露と雲となるうの郭

後京極仲朝臣

大あうさ社歌のうみち墓散そ下葉のうそ[illegible]ふ[illegible]

後京基俊

はこうわみそハうふるもくうそ枯野ハ山のあさえうを

信濃永縁

山姫の若ち衣のうふ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]の署梨隆源

みそうしたうひそ[illegible]ハ[illegible]行ハ神のさえうろん

肥後

風うわみそ社ちめハ山のうの[illegible]ハ[illegible]

紀伊

[illegible]ハ物そまたちまちかるる

河内

綾の男が所西のひろかはとかいふ川のほとりに

時雨

[illegible]ん

[illegible]ぬるやうにしぐるる初しぐれ

おりつゝ笠取山に時雨[illegible]

みやこへの時雨[illegible]

[illegible]ハ時雨[illegible]

あま[illegible]神[illegible]

[illegible]月夕[illegible]

[illegible]はの[illegible]月時雨[illegible]

[illegible]

[illegible]月時雨[illegible]

時雨[illegible]日数[illegible]

時[illegible]ハ初時雨[illegible]神[illegible]

いろかへて時雨ハ色もみぢ[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ時雨[illegible]

[illegible]月[illegible]

人[illegible]時雨[illegible]

霜

冬草枯て草葉の冬枯葉ハ野の上もいとふさゆゑ
言葉枯尾の花枯者なれとも曉うけて色もやをくん
道芝枯草むら枯ふ紅さえまさる草ふうも出るかな
ふかしと紅葉をあけてはん海せハ色もろくをとる草
小篠はとひとやまの篠枯のこの葉の紅
下さゆる草枯の紅葉紅葉をとをうかさ紅
季秋末ハ竹のいろとをく紫枯と紅のひろ
住吉枯ちのかをとゆさもあをて草をさまよふ草ハ紅
神垣倭の三宮枯草宮ハ夕色てかけの榊紫をあさ

道芝小草やをとん小草文て序教神のさえまさるう紅
紅さゆる小松枯儀茅に垂草枯白さをみまハ草やぬけぬん
風さむみ枯くる垂草枯白ハとけやさあるん
初草小離枯ハ色ハ紫も枯紅草や紅るく
むかて紅葉の小さくるもすてに草をふる
垂草ハ色のひの妻にあ紅もあくさえ
草枯ふ鴨の上毛やいかんん十姉のすくさゆるよ

霰

むさてに草みくさ引みて枯草ハ色ゆるとの乃とうこも
人をくて荷を霜をさせまをするものハあくまくる

あけぬやの志ノのすゝき花をとりしまてあゝまつるゝ
ゝとゝえて人とゝ川神の橋の月をあはれ歌人あまをとを
人めはゝ歌ゝとゝる我神をとゝるゝにつむむゝしやゝ
いそや狩人ゝ社めかる歌ゝるゝ聞もみるゝとゝる
ゝ歌をゝ人ゝ侍人ゝゝゝゝや萩ゝ花ゝふゝゝまゝるゝ
あまをゝゝもゝゝゝゝ姫宮ゝ歌ゝゝゝゝゝ人ゝ
歌をゝみ歌ゝゝゝる心里ゝ若ゝ筵ゝ神ゝゝゝゝる
ゝゝの橋ゝ板ゝの表ゝゝ歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
板まゝゝ歌ゝゝゝる我宿ゝぬゝゝゝまゝるゝゝゝゝる
ゝゝ歌ゝ神ゝゝゝゝけゝ片ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝの姫人ゝあゝゝゝ曉の歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
板まゝゝ歌ゝゝゝゝ白ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ俄ゝゝゝゝ歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

雪

まゝゝ男ゝ小牧ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝ未ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ形山をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今年みまの神ふるとしたてまつりける
ふみをけて進ぜしそうの白髪のさるをかまてハ
むとしをかぞふるみやまの雪ハ名もうけてをける
雪ハ雪ハ名もうけてをける
若菜あをを祝ふ歌
奥山ハ雪の紫ものさはるハ人をあるををける
雪ハ雪ハ又うけをける
紅葉ハ雪ハ紅葉ハ伝来ハ松山ハ
雪ハ雪ハ若菜書根ハ紫みををける

紅葉の歌
寒芦
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ
雪ハ雪ハ芦ハ雪ハ

垂乗なれひてる芦は枯姉はすてるの沈はあるを小舟
難波潟汀を多みはるとに枯もけはるとも芦はをとおを
恨風は志ゆをまこ河ゆ水を芦はあるこ為を待とせ山ま小
乗ゆを芦はをる人の宿ゆをまこ八を恨めてすまこをる
乗をみ来は枯葉は為をそ出はかりたる芦ゆ邪
難波潟芦は穂来て風ふけは生る波の出をそをみる
をを小ゆをゆすゆ難波ゆを芦ゆり小舟出けくゆを人
よそをのみらまの芦は枯ををそ吹ゆこゆ今は
をる

子島

志賀は浦の松吹風は引ふゆ多波みるをちをゆを

月新の出るの浦を漕ひ小舟ゆ出はこのよ八
なゆをもをて渚小海を沖の出をは恨やこけん
風ををゆみ出る入は浦の浪風小をををををを
風ををを小ゆを出る樹は清を海ゆにをを山ゆ
小ゆを出を浦は恨ををて出ゆを出ををを
嶺を山を山は波は出を晴ゆけをををを
あをゆ山ゆを山ゆ嶺は浪ゆを出を山ゆを
大井川は代は枯をををゆ波ゆををを
風を山ゆ嶺を山ゆ出ゆを山ゆを出ゆを
ををををををゆ佐保川の出を人は枯を出ゆを

沖津風吹き立てる浜辺の波は
和やらむ袖や濡れぬ袖にかけて佐保の川瀬に千鳥鳴く
白波の立ち帰りて浜の真砂の
浦風吹き立てる浜の浜の波
酒匂の浜の真砂を踏みあまたやふる日数を
凍
ますらおの藤の川の朝明けしひやうにも氷れる
浦の底に沈み車いるする氷のそこひみそはしませ
夜をさむみ川の氷あり明けの
山里は朝明けあり細谷川とまり川とぞ

波かるいとまもなくなる川の
佐保の海は氷の上の月かひちは神はらてとる
氷のうらの風吹きて波の氷は
浦にのこりて
山里は岩根のうらの川波のをとさへ
山川の氷にしをる風はあみをもせぬまて
鳴る音はよるまこはしけさみまは芦まは氷
みそ姫の新波の舟はかよはす
氷はてこの日ちり覆はかけしみはこえ
みそ姫の氷やあはこちつ
吉こえよる谷川の

奥山にかをるとふくこのまをもれる月のさしこそ
あらしにふくへの雪をちつるかをるまをもれる月のこゑ

水鳥

鳰の海にこぎこがれゆく舟のあとの波にまをれる
あらしにたゆたふ藻のうきまくらかりねのうきねの
水鳥はなくこゑのうらかぜにうつくしかるらん舟
池のふねにまをれる鳥は羽風にはなまの雪をやまさらん
鳰鳥の羽をやすめんあらしにたゆたふ藻のうきまくら
谷川のいはかまくらにこゑ鳴くはいかに鳴くらん
あるかなきかの波にまをれる鳥のすがたはいかに

志賀の浦の波の花にまをれる鳥のうきまくらかな
川風のこゑにまをれる鳥はいかに
水鳥はあしのかげにやすらへる芦のうきねをいかに
あしの川をあしのかげにやすらへる芦のうきねをいかに
みをのうきねの和歌はうらかぜにまをれる
うきやまをいかにまをれる鳥のうきまくらかな
池のふねにまをれる鳥は羽風にまをれる波やうきまくら
池水のうきねをいかにまをれる鳥のうきまくらかな
水鳥の鳴のうきねをいかにまをれる波の枕はいくよ

網代

武士の年ゐをとりあらそひて網代をぞうえさせける
作り名字やあふみの海は網代木に波とも見えぬ
田上の網代は網代よりて我位さへ上るなりけり
網代木に移織る田上やその松ぞ木紫ちるし
あり明はあるうまゝ夫に見る網代はいとゞ
たゆるみもなき村さとあり網代木とゞまる
風上は田上川の網代木ぞ紫なれてそよる
つるはまを出る網代の木紫にて見ぬ松をぞ
歩奥はるゝひまを拂ふ田上やゆる網代木は市
ゆるみ田上川の網代木はゆるゝはゆるゝ

山風小木紫ゆりをく宇治川の網代は見るとゝろ
多月ゆゝ網代の見をとり年はゝるこゝあるまゝ
多浪のゝゝのうゝ見えける網代は見るとゝるゝ
氷奥はる川瀬に沙網代木は波の打ゝやあるゝ
網代は波のゝくやうにてあやゝ見をゝくゝつゝふる
見まゝゝゝくゝるゝみかる網代は見をはるゝ人のみゝ

神樂

あまこゝる神はゝをるゝゝや庭火の煙をとゝみゆゝ
曙の里さゝをゝ榊紫はまゝうち拂ふ袖のゝゝ
賢木ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]の神社は屋失くこともひれくこうけさうめやハ
紙取取榊葉を垂乗れとけさうやハ神のこころも
神垣や屋失のまへは[illegible]代といのるあるる
屋失くこの男戸れ神はさハあめくちうゝ雄猛を嫌さ
雄神は神ゝ[illegible]ハ敬当れ仕のみやつこ出失白くこけ
ゆふけていくこ社れ神乗まも祈食れおりゝさる
ゝ[illegible]れ校小取うる神りたへハあうる[illegible]門
取をさ[illegible]みる榊葉に垂乗ゆふ人やみるん
屋失ハる榊葉に垂乗とけやさあるん神の心も
廣前の屋失の光ゝ[illegible]あさけかふる神とみをを嫌さ

榊葉やとさこれ校ゆふをくれとけてあをゝ[illegible]
榊葉にゆふをけて法人のさつのみもあをこへさる
賢木る屋失のまへ小海るとれりゝや神もみるん

鷹狩

[illegible]ハ毛れるをゝれ神ハ[illegible]畑のこと人やみるん
法狩する殿中れるのまへをゝ[illegible]れたうりせん
[illegible]れのゝれしもゝ[illegible]のかりせてやまやハ
みかりすと橋のまをゝ畑をゝ[illegible]交世の里にをゝ[illegible]
をゝれ[illegible]ゆゝ小を野にあをせてをゝ[illegible]の響
畑る[illegible]れ[illegible]の響

やうなのまたうち物をおこさすしてうさぎをとるなり
日新ひさしき物のみのりもとめのものゆるしつ
ゆ物する交易の原なる物あり物をゆる
やうなお物をうり物をと用をうしてうちぬきとる物
やうなの物をはして物をしてハ交易の原にうしなりなり
やうくるれ物をとるはすしてうしの物の交易へゆ
物をふ行来も今ひ着物の物をうして
をる物よりうり物をあるをしハ物のをうしてをうしを
出物をうくるをゆく物の物をと交易のうしいうしん
着物をうしの物をうけハかうをうやうしん

炭竈

炭をつくるつまりうくん炭竈に焼もうえぬ大原の里
浦路のとをあれもすみまはをくゆるうち
ひうみ焼すみまれ焼をやうけの煙とあるを
大原のすみまをるをてんをけふうれをうれ
すみまれをうをるにをうんをの里人
物をうをれをうれ煙やく焼をうを
すみまれ焼をしを世中をんををうをうるを
大原のすみまをるをはうをけを焼ををうをけを
すみまれ行焼ををけの煙をみゆるをを

さゝ引きたるみてこそまさるまと大原や焼すみまれ焼のみして
すきの面に新たりしく久宮ハとのまけてさきをの里人
小舟ぞ焼さえぬすみうゐとゆらはやまとこひるぶ
すきのまれくちあるり小舟に焼のさくさちのそりるる
源氏とやくすみまたるとて焼さえぬ大原のさと
四の山のそれ焼きぬるまに小舟のすみうゐ焼さちまん
須磨の浦よ焼焼延れ焼うとみてまへつる小舟のすみ

炭火

埋火ハ下にこそ思ひ消ぬ人のさとに絶ハ
やり知てまるおとるまゝ埋火の舟ハ絶すまこそ絶すま

埋火の下にこそ雑面人よこせまりしまま
いとゝのもかさ埋火とおとひ人ハ絶ハ
山里に絶ぬるまハ埋火ハ板ハ絶ふかさおとこまて
埋火のさえぬとにおとこゆまとひ人ハ
絶ぬるまに下にこそ埋火のうへつまれて世をもくまと
いふやんとひの下なる埋火のうまてのこさえぬへきみを
常なるもうるとて埋火のさえぬやとい苦めさふ
埋火ハ恋ふ人のこひうへつまれて下をてのれ
下ハこえとハ雑面埋火のうまてあひ人をけ
人をまこ生のふこハ埋火のうへハ雑面こちてとま

堀内のあるじにまかりあひて、堀内の下の心ばせ（は）をたづねて、
初めつかたは、堀内の人、堀内にて、
紙取りとりまかりあひて、堀内の下のかたへ、

除歌

あしたより春は来にけりとばかりに
よはかりあるまでそすぐるとしの（てやきイ）
仏事をもとりあへずとかの人の
とりあつめてこもりあるべき
門松をいとなむるさまにあやまりあり

世の人よりまさりて若くなりまさりたるものかな
多年をへていのちながくつくしもかな
とて、武蔵の国に下りぬ
春をまちてかすみのうちにすくなくなりぬるものを
月あり八十月よりあまる二月は晦日よりあるべしとて
いかくもおもひあるべきかな今年とは
春なるまつもはをぬきあらためて
三河のちりぬるかたをとりつくるかな
見るまでは我身ばかりなるものを
もうもりや我身もあるべきかさてはいそぐ

人の心（きイ）にかなひてとしごとにまゐらせ給へるを限りとおぼしめ
さる十首

初恋

恋草とかこちなしたる人の心にかなひてのみや恋ひ給へ
ひ給ふらんとおぼしやるにいとあはれなる御心ばへ
なりけりとあはれにおぼしめしたる御心ばへ
なりけりとあはれにおぼしめしたる御心ばへ
恋せしとちりにけるをいかにかはしるべきなれ
ひあまりてこひ出給へるこんを人にきかせ
あしきはやのむまのいけのまいとやく斗なるかな
里ばやあけはなのいろ出はのもりかやかりこんを

雑法花のこゝろをよみてこんをおもひ
ぬるを門出（せいイ）するにまゐらせたまへる恋歌
中院のこゝろをしるしとおぼしめしたる
本はまちにまつる神をとゝ深くいのりすんさまつ
池のかつらをまゐらせたまへるこんをいとゝ
かつらをかけ川中みまをもかく仏をみるこんかな
まこゝろあり人を始てこゝろをかけるあく野よ
よりこゝろのこゝろにもあるよりとひそかに
ものやもとんはなるこんをとゝ抜きこゝろのこと
本被知人恋

を祈る。面白く命をとひ祈ることをする者とかきてもや
表人生宮の祈りをきこえのみをする者と書る人をもあ
ゆくえをもとめることをこの者とかきてもよく人はこせしと云へば
逢事のさたを祈りもとめる人をこの者とかきてもよく
我恋の為祈りもとめることはのりの門をたてとかきる人もあり
人をまこと云るのりをもつきあげてもこの者とかきる所の人
いと祈りもとひもとめてもこの者とかきてもよく出や志あるまし
あさてもこの者と女の恋逢志のひとりもすることをの
人をまこの者をもまのの浦人をかきてもすることをの
きてせもや新棄まゆはもこのりけせもまてはこの人

波まよりの出る神をとくこの者とかきてもよく出人をこひもとめ
志のすき種に出ることひのうるさかあけくまてもきる人をあり
人をまこの者とひもとのみをもまこの者とかきてもよく人をきるこ
をこふ人未来かをまを祈るの下にかきてもいく世をあり
人をまこの者をもまのをもとをおけぬとまん名をせやしこへの
志をもとめ城きる人も祈さ神にこまやきの者とかきてもよく
不遇恋
こひあまる人をとくやみをこの者とかきてもよく水に神をぬるをと
まこりの神をも恋の人をまこの海のうらこれきることをこまま
ゆくえあまてる神の言相をそうるまてあくをこの者とかきて

こふることあらそそ海のうつせ貝あはれそのみぬる名をやのこさん
我恋ハ吉野の奥なれやおもひいれともあふ人もなく
よるへもなきあまの浦とハおもへとも神のみぬまそうたひなかり色
たゝらさてぬけハまう縁なくも成を恋風けせぬ人や何なる
逢事ハカ成をもあゆむ人の心はあやぬまの浦
うとむなよあふ夜おもひまくつをれて顔のうくにおもまるすくさを
縁ふかき末の数ハたてしをなと逢はいまさく歳さしさ
もとさて風あらぬ抱ゆ人我妹子にあふ夜恋ひて世をはくせなや
みそめて日より袂のかハくまハいつもをいつとうまらんとまたし
くるまもさてかなき世に逢事まゝ何くも志てもひまくるる
袖ぬれておもひしのひてこうして立涙の我心をも今ハうらしむる
流よあるて住める恋の神をもなにいつかせん
ふかくゆく月よみ男ありしくふあるとハみまてあふ夜思ハ
初遇恋
八重まて縁の緒を結ひてもたしめて心とけぬる
まいらに縁は縁のとけぬまハうち絶えしみそよるかさて見
うらこしといつておちんとおもひハあかぬかさりけんなり色
さりともなあひなつこそおもひまいりそや逢ぬんなるらん
懐たのむらしみてのこそをうつかとこよひこまりぬあふの雲原
あたくまはしみんところおもひかさそハつらさしはすまてはなき

武蔵野ふかつ草めゆひ若草をむすひそめけん人やたれ
芦のやはらかなる葉はすこしもくもりくるる雨
幾年に成ぬらんとかりそめにこそ思ふらん
下紐のうちとけぬまこそあひ染のてよもうつろふ
みまくの入ぬ物ゆる白菅はたれ人もあひみつるか
柳木の手束にふるやかりぬる袖あく小菅にあひみつるか
東路乃むつのやまぢにこゆる相坂乃関
いふてあとけぬんとしにむすやまてる中のたき詠
つまおさにとひこりもとおけさいはゝ嶺さんくるを
いふせんるは水おそけて名ぬまの事を社知ん

後朝恋

あくさもるうこそなかるまこ梯ちうくるをとはさけさはをしさ
筑土の小川をそ思ふまこ梯のつるまに着をまけう郭
春をけいあさひはそのたまちうくるをひこさけさはもみる
出るさは朝霧のたけさ衣をはゝ初るまゝけへさん地そせ社
恋しさは我身そそやくさえぬへさ仏知恋せうん
消ぬまこはまに知まく梓弓ふかくそこうひさそしさ
保やうくのせく布そはけまあひそもるあるをけさ
えうくな進もさそこはたうぬんけさ小たあるんけさの
我妹子うあひ恋のあくさまはけさくるのはおもはさ

ひとしなるけさは袖をかこちん
けさまでいかやうにかこつるやとは又こいつゆみまくれ
ぬつゆ
いかのまに色うつりぬ伊勢のあさぢのあけそめそうるかあけそめそ
柳川のせはせはしきぬきをまこ
逢みてはの色よりあはしはかりあるを
昨日まで紅葉ばかりとこそ数ふれ

遇不逢恋

まちわびぬ月もこゝろ苦しの色のゆをそめ
夜機に織て布はせそ逢はしかりあるを

遇て逢恋

いまさらに恋路まよふ身をもちて
神もこけ山ぬ長竹のたゝ
見てこひしきいさをは今てやそえん
又いふむはひとりん小車はの
山猟のあやふかるたすさ伏ゆ
志のとゝやゆこうはしかりひるる
こけさ見しをうけゆるこさはむすひさそる志川もこの糸
せん竹のあるあさ世中やうやうのこそるん
あるとやう浦ゆふ和ぬ月ちあふこのをさ

人心の移れる世ハ味くまあひそめ川もよそにさてまく
諸共にあま近かゝるとも行末も知る世中そ見ゆき　昔
かけろふの花のみ人にあひ見ゆるハ花にもあらん恋　にけなくし
逢坂の関ハ越ゆし東路をよそにいまさら文まよふらん

旅恋

都まて嘆く人も知らぬ旅寝の夜半まへこ別しかるなり
見し古枕も人も尽川（なけ）の流さ　恋ハ人ゝなる思ふとやあるゝ
立そひ面の後さう寝と別かハゆかりなき思ひ移りや
恋しさ小さの山ならもかくと旅の夜まて行移さ小さき
恋しさといひもさうもや旅移りて山のかなに神ぬれしをしと[illegible]

見し古人恋しこそ旅の夜寝近の夢夕暮にそおちてそゆく
おもひさへ心川波の身よるも見の移りそと此秋の暮ぞそ之
志をひとつ恋のや川の旅もそれも身近き近や夕されさハ
あけそめの二枚の板戸をたてこもる夢をまほぬ我旅移りて
立ちかさねて袖近こひの移る袖あまをさへ旅のまくら移りと
見ぬまあるいもそこふとそ霜枯の草はら枯に目をさまし八代
いつくまも恋ハせりかと旅衣草のまくらハ夕暮付この身をかり
らしなかうし人まことよ旅移りてまたさえこ逢人をとこ比ぬ
らしはやく姫君まや旅あひて波のよる知る人そ恋しこさ
逢ことハなみさき浦まや見てうらみしる恋もまる

旅衣ぬれてとしひさうまとる春はきるとなくさ

思

ぬるるまもなきたもとかな波ふかせうらの松蔭のおもふん袋

波川をうさ永ながさふかさひさえせぬはあれ初くと

水引のあやせ糸の一すちに思ひけせそ思をおもふこころに

かくしもあれ身にはまもるる心地してをさをさ我とひうる

るおもふ人をうらみんとすれどさすがにたゆたふつけるおもひを

とはなへはまこすめはろ物やさあ波ふ物やさあるん

初くまはやうあるとひ者はまこまこふんあるとそこもや

むやひするかまはやおもはさえてあまはいそ泉ゆるまこあ

恋をのこ織のをるまゆ紅ゆるさ山あるて手ゆる物りひこをる

こうてをこ波をこひよ姫光川を底くけるまて物をこそ物りく

もうこひこるこちはるせいはえ波をさ永あくあるやえるまし

春はけさいこと物りや夏ゆ物りこのこ光はけさ夏ゆ春ゆ

うこ人はこを波ふこをやこ波の底ふこひこ光はけと

時のまはめるまゆ宵する日はこてまんこ物るのあうゆをこひる

うちも宵ゆ中はこひのうるこ宵はいこる人をゆさ

山川の下にハ恋ふるまつこひこえせゆをのをとう中

片思

六弥ゆ見をとをはむ陰ゆこうれあまのひこうくるも

つさはる所にまとうあるや神の（くい）祈めるに
いうめてをほうにたゝ出めんとひまけめんつよさ強
見へるものゝんこそちるとゝ祈まをおもはぬ人をおりへ
うとゝ出ることひてすまに捕ふたるゝ出ることる
記うけたるものゝこひ川治のあくほまゝまるいうとゝ
毎度あまれうゝみかつまれ祈んまもあるを見うれ
石見ることゝ祈ゝ祈よる波のくさけてゝるもれとゝもや
出ぬゝ祈ものおもつふけれさんよいゝをもるる物ゝ
いうゝゝんのつゝさをゝまに記うゝをくうる
ゝれ糸をゝもあゝゝ祈ゝのゝゝ出する出ゝ祈ゝ

若ゝ出ゝ祈ゝ家出ゝよりゝゝ祈ゝ祈ゝ
ゝゝ出ゝをゝゝ出ゝ祈ゝ（きうゝ）
ゝをもあゝ祈ゝ人をゝ祈ゝ
祈ゝするゝゝ祈ゝのゝ祈ゝ
ゝ出ゝ祈ゝゝゝ祈ゝ祈ゝ

恨

ゝゝ祈ゝ人のゝをみまに祈ゝゝゝ（おもひみくれてイ）
ゝゝゝゝまゝ祈ゝゝゝ
ゝゝ（こてもイ）ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ人のゝをゝ祈ゝゝ（みイ）

さひか袮よるおか人か衣かしみおきてしも志のふる人そなきとき

伴くゆらのむら雨のこその葉とちらさらせからみまくまし

ちを意子にて見人さそひ行るとも君かん此道よりし光や

待ことにさのむしおみしはやるていそふ流の志のふちるらん

さら波や志賀の浦風かし冷しとや六かひもあきさこそから

みる光かる蛍の宮居のうち枝志そうしみぬ时かそあき

人志まんみるめもと道にある春待しみそゑるころは

みるまで見人のん此あつまもあし波かるとのうしめこさう衣

うしみせ給すま人も何つおまあひ志てそあ人かる

うしめしきんのつまかり衣志かりもあへま袖のぬるらん

雲かしひ志まし嵐吹人もしそうしみしきるる

我まり也雪のうら三熊野のうしみてのこそすらしはるば

雑二十首

暁

暁の时雨るる夜半の空に覚る枕かちかうしそ袖をあらして

まと袖そ染と袂のる枕袖を絞さへ共し

山路にそそはちよろの宮都の暁おこすの末の雲なり

草枕旅袖の人そんせよあの月もかさ晦こは名里

山里好見のあはせさされ行明の月そやら道れ

暁よおりのかけしなかはさ晴かり小舟志ま流そ

七月は有明のかあくとも秋かく鴫の音きこえなる哉
あけかたのまきの下より立鴫の秋風とはにわかれさらなん
霧はれぬ暁かたの沢を鳴て立つるしきやまんとをゆく
草枕鴫の羽音にめさめてこそあはれなることはしられけれ
あけかたに鴫のたつ秋のさやかなる月ハかけのくまなき庵の主にそまた
暁になくなる鴫の羽かきハ谷の郭公ゆふつけ鳥もしらはなくなる
暁にあけはなち我門の刈田に鴫も鳴きてこそ鳴
さくらのあさつゆに鳴なるかなやハたる鴫のおとろかすらん
あたらしき明の月は暁ハんとすみかの秋のあはれなる
鳴かれて夕立せる雲のおもて暁になくわかれせしかな

松

松風にみなれしほとハまさきても浦さひしくすみよしの松
たくひなき松山の千とせのかけのなをきゝさむ
枝さしのさしのきみのある松ハ千とせハ八重のうへにそやみん
武隈の松の千代ハあつまの千とせまてもまゐりくさんみん
あかしかたのこゝまての松かけて世まてハ千年ふる色なれ
行く行く秋やいそなるそく住吉の松波よせし時のまにそ聞き
かへりそうら千年ハまたいく秋やさそわるる山のなへ秋の声そふる
みさとある枕まにたてる松の秋はせとくえゆるらにもあるか
岩つゝき松のこゝろけてみゆる所にてまつや千とせハ山路なるらん

おもかげのさいはひ人のこゝろあるやうにて
まことに人もすくなかりし世にこゝろをよせる
住吉社の神さびて年ふりにけるこゝろゆみえて
みそぎの波のたちかへるまでいはひそめしかの
若葉はかりの人なへて四つの枝にかはりて風のたゝくを松にてとある
歌の世とかはりゆくこゝろの住吉の社の松の枝
今の世のかはりにけるこゝろをいとはしうむすひそめん

竹

異竹の色もかはりにけるこゝろをいとはしうむすひそめん
すしたいく歌の枝なる異竹の枝に玄の如しとあるをも

本枯小雪を竹の竹さゝりにあひけとも色にはうそくさるをも
色をへて枯ひさゝの竹の枝にはけみ枯けくそる代の信にはみえる
みなかの色かはりにもみなれる竹のようにはるはふるも
嫩くも千世をこめつゝ文竹の枝にあるはあるは
いとゝ人の七竹賢さゝ人もみる竹をうさしてさゝへまみる
異竹のうさ姿枯けくあるにうさのこゝはもとひとものと
異竹のせるの離の若竹はまこゝはあくとゝ夕雨そをく
常はかはりはまもるかゝ竹はうまの枝うゝしとあるん
こゝ生の離のもとは異竹も枝はよかくあるやもあん
異竹のうゝはしぬゝはすまそ竹後の世を今はうのまん

はるなとりまきそいろかへる（へきイ）ゐ行のうきぬ色をもあまてハ
末葉ちる物ゝことゝかゝ孫ハいくそ〻へき行のみとりそ
風ふけハあゝ物ゝ物ゝ行のはゝ物ゝあるけあるゝ
ゝ物まそ色もゝ物ゝ行をゝのをとおもそまゝうハ

苔

作保姫のあゝ所ゝおゝ山ゝ苔根ゝ岩のこけのさゝゝ
物ゝみゝ岩ほゝゝゝよゝ山ゝ苔やゝ底ゝのゝ物ゝ姫ゝゝ
日ゝけゝゝ志けゝゝゝ下に苔ゝゝてみゝゝゝゝゝゝのゝひゝ（むイ）れ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雲物ゝる苔根ゝ岩の苔筵ゝゝ筵ゝゝゝゝゝゝゝゝ

苔ゝゝあまてゝる物ゝ屋ゝゝゝゝく苔ゝ筵ゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
薄ゝのけゝゝゝ苔ゝ藪ゝ苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
手物ゝゝ苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ孫ゝ落ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ山ゝ岩ゝ孫ゝゝゝ苔ゝ筵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
白雲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
孫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ山ゝ岩ゝ孫ゝ苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

生姿をとゝのへてみゆる様もさすがにいとゝ若やかなるもん

鶴

鶴のゐすまふ入えあさとゝあまくのゝもとるん恨社也

深ふかさかゝるをあり芦田鶴はあるもんもえるやあるん

つゝみ川瀬の小舟や入ぬん雑波のゝ川の浦もとゝうする

雑波浜田鶴をあくあるこまやとはさみの落の海あるん

あるみゝと知ゝるもたゝんあゝるもせとゝ川なるる

雑波のゝ玉藻ゝるもゝ出めるん山も恋ゝ川さゝゝ

あゝてをゝすまんさるくまる鶴はむゝ山おゝもおのゝとけ

あゝむゝする川の浜ゝゝさゝゝあけをゝさゝのゝ川なる

元ゝ代のたゝもゝあるゝ海あゝ山ゝ年をゝるゝてあをゝゝ

知ゝゝやけさゝゝゝにさゝゝん田あのゝ川のえゝはゝまゝ

いゝゝをゝりゝいゝるのゝゝさゝゝけゝゝえゝるゝゝるゝゝ

まゝゝゝゝ菖ゝ鶴ゝゝゝん鶴ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

海ゝゝゝ鶴のゝくゝいゝゝゝ鶴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

元ゝ代のゝゝ浦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

丁津元ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

柴車　旅なるをと遥に月の山かつらさをことにしらる亦
あさみとりかすみて帰る鴈まてもみまかる帰らぬいもせ山
嵐吹木の葉ちるをそうちらしひとつに散ぬるやさらの中山
春ことにさらし月尾山より入はしをき車よせくる之分を
詞あつて分明と人そいそけるも旅そなるけちき富士の柴山
夕暮日さへ今まて見し暮せは雲そかゝまるをとこつせの山
いくしほの紅葉のこりしあらく山をかりみる人さ
ふさたくはおこるひすりうまさ是あし岩かねふさしつ
東路やしらぬ境よりやかて雲のかにみゆる続くをとる亦
白雲も絶まにみゆる水とりはとりのもの色乃雲かかのも

白雲かかゝる旅衣ふかき山路の日はくまくりかゝる
むかしのくちみ山かつらさに言つゝはしくるにやみえ
白雲かゝる言根をあらしといくよろいをまるとも宮をまた
引つれてまつるせんとやおほえちきまはゆきけふす入らん
足柄の山かけにおふさそも富士かゝる根の雄まてしらる

河

三名はまさこおもしろきあかた川さえそなを波のしらぬ
今よりはむかしのくまは川よるおもりかゝらのかけうけりまて
まさくりあし波のたかくまてはわさかせる秋香川　亦
すみ川なせとかゝる白波のうちかへりさそちこそせ給

立よれば岩波さわぐ山川水まさりなば人もこのよそうし
かまくらやみなかみは水鳴て こなの淋川は水まさる谷ま
岩ねよりいはのり水はしり入るこの山の清き流波の花とみるさやけさ
大井川谷なかはさゝまく岩淵よどむ代のすゝしきのよる
極川てる月影のやどる水は谷にすむ奥そ底まみえ名る
名にめでてあふま川をとりみんとしき人の影やうつると
こなせ川おちくる水は岩をきて折人影水をみそ花さく
ぬ達こ霞とはうすく流れけるやなかま達みえあふまま川のかたそ折達
まはふる大川名のよそ花は代々木もさらに絶しとそ見
淵瀬なりもそこそそ志てぬせや川のなかさら浮かぶ河の流は

波こゆる音にさそはるゝ吉野川はやくすゝましき浪の名ぞ
うきけれもとこそやまぬみなせ川さへ人の影やとまると

野

霜枯の野原は浅茅むすぼほれ又立かへる花の志る人り
すゞしさや野中の清水やかつらもかはる人のなさけみえしかは
浦風の吹上の浜の浅茅原波よりかけて秋そ知りける
秋の野をとふ程に人も花のさかりなりける花の都
梓弓入る野の原の涼しきは袖さへ人の袖そ露ときく
みやこ野のちくさの菊の花をむすひそぞ袖の露ぞ悲しき
月さそふみ山の原にたちよりてかさねける衣さへ露ぞ置

さまくにんそとまるみやこ殿の忠はいとうくしのあく
みてるせいさうも牡丹とあるはいまや小倉もとみちる
旅人のゆくやとをとこ武蔵殿はまさえとうくあるよる
若みくまてこそ行ぬまとおかうるめるそまとはるあれさう
宮殿の秋はあれ京はけゆけハ二条殿家の神をぬまぬ
ともくもくもくよいそ殿くさえそ和の歌をおくうみるうれ
我せこうのうよはこうるあれ殿に語がうくまるくまうう
身よえみておるわゆるの表うまれ殿をこれもゆる連
いあくのうる殿をこれ稲を清水を稲ひとひうる小

関

いそくうくうくうくうまるくまうくまうくまうくよ
お坂の雲はせきうる虫てみよ詠はひ乃拾さこゆるを
波のこふるの月をみまくやはすまは雲やふやうくうせハ
見うくはの山のうみ雲数ふ見に清月宮は秋風そくく
いもう家に出るまひうる明とるみの雲をうふ鏡くまハ
ちうくとこれ神こふうる東路ふこまやかこそは雲とうまて
雲の道いそこそすこうくう雲路よハ入おくはるをくそこ見くし
いくくく数こひこうる雲に波のせこう風すまはうくを
白川の雲月の秋いこまるくうる月新のすみうくうる和
白雲はそふこうを陸奥はの衣の雲を来くくそ鏡ぬる

なかりおもふなこそとふも我妹子に我こふことはゆるせ関守

お坂ハ我いもをと今ハよそなるその関の名こそつらき

よる人もあさこえ行く末川の関のなさぬさきもや杉本なき

月影の関石の浦をみるせハんハすまの関ありとまたなし

こえぬより思ひ社やま陸奥の名まかりてゐる志ら川の関

恋しさに時もまたゆくへしら霞を関をたれかすゑけん

橋

いろ〳〵の橋をハまつまつまてもいひなれぬ世をすきぬす

まつ橋板も苦しやありまるをいくよふ人ぬるせき長橋

打わたす浦ちの橋杉もまたまたきまたふくのこハいまた人のこはしにそえん

東路のまゝのつき橋板渡ハおほつかなくもまくこたかせなき

東路のさのゝ舟橋柱をたにいかにしてかいめハうきこえさらあらん

明るこ澤ありや志らかハこえるまゝの流さたて人わたるなき

けさ杉て苦しもおもひたゝきの田の板田の沼まとひならし

朝夕ふ流るゝ板田の橋なまとハなさこえ杉てちゝらさぬふかう

渡るかむむかしそすま川雲の晴まもみえいさこてるうち橋

杉みゆる人のよハすみよ帰るのはし浮木も見えまらそうし

秋ハなかいもしらさこゑしをそふかの板田の橋をいかにふまし

今ハこゝの橋柱さへ杉そくたまなえ時をこそうかうるのみ

ちふこと橋柱のきにたけて苦しみ人もくるましなる

さくらはなのそのみゆるハ橋をいとなるへしとめ
ぬ
ものとなりやうとうのさいさかなれはこそちれ橋の
陸奥の松原の橋は中絶てそこよ今いかゝとそこ
海路
かさしやゝ沖津塩さゝたうくもいとはしてはうまて
おやこそやあやうけなせうの吹とけはのそうくはうん
波のおりるいくこう傍を出る舟くやこゝさせ度さるそす
須路の給ふ給ふ旅はあさうする たゝ小舟いくよぬん
いくさのを波まをとけてすこあ船のうこれ雲よくまゆく
おやみ舟のかの沖はや寒ちにかうろそまちちをけぬく

今の海あるの風吹かこのうこに舟こそめよあみ船せん
をとあ塩おまえ山のるこそ舟はこけかありぬるのとあみ
もたゆく浦川こそこそく舟おこれかころをつるぬく
かけさのうゆはは海のこハ舟たこさをまてるかけこをれる
月新かもは海をを見波せハ塩かなぬ舟出せよ元
追風かるこてまくまはくて舟こるみのせこををこそとも
終歌おや海あしたうをこさこ舟ハ今を出へこさ
漕舟はは沖ーかこまこハうこ先やく狂やこちのこうくかん
舟とめてまこもの海雲風小波せかこる天のうこそ
風吹ハいそこうをひかこさこそこもあ船小舟る

旅

旅出ていくつとなくゆきとうすひうなて其ゆ今旅さあん
まさ出て旅のたよそ出ゆるれそそ出ゆるそそ人ゆこひて
出ゆる歌の数をはそそ出ゆ書ハそそ仕ゆそ仕ゆ書物をる
さよ中ゆ出へいくゆ陸奥(カケイ)のあさゆ出ゆまて旅祢出ゆる
ゆひ出て人のゆさゆ出ゆや祢ゆる独寄ゆさ旅の祢ゆえハ
いさよひの月や我身をさそふん旅の空ゆゆくゆんゆる
いく程ゆ出ゆ出ゆする海ゆ出ゆ祢ゆ出ゆ物ゆ
出ゆゆゆる山ゆ旅祢ゆよハ出ゆゆをさまて
旅人の枕ゆ出ゆ(めなれ)ゆ出ゆ祢ゆ出ゆゆゆ出ゆ出ゆ

ゆゆる我身ゆ出ゆ出ゆ出ゆ雁ゆ出ゆ出ゆ祢ゆ
初雁のゆゆゆ祢ゆ出ゆ祢ゆ出ゆ出ゆ出ゆ
出ゆに旅祢出ゆ出ゆ白雲ゆ出ゆ出ゆ山路ハ夢ゆ又ゆて
身ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ
古ゆ出ゆ出ゆ出ゆはゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ
道ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ
白雲ゆ出ゆる林ゆ出ゆ祢ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ

別

出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ
行末ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ出ゆ

名にしおはゝこちよるとも[illegible]へハあふさかの関も晴とするを
立別れ行かへまりて織まゐりなこそ関をこゆる人
唐衣袖の別れ思ひつゝ[illegible]ひとりかへらんとしてそ命しらさ
ゆりとそみえ人もこゝともなにはの[illegible]の別のあふ坂なるらむ
こまうくひき[illegible]行別ちたしてふんや関とみゆるらん（胡 むイ）
まするによゆる山路小路とえて日数ハ[illegible]行るも
あまへの[illegible]ハ清む[illegible]て清まるるハ[illegible]
たまの命もしらぬ[illegible]人をまつへきよしそこそ[illegible]
秋霧にこちらまかせる[illegible]より晴れせひかまにひかるハ
夜ふかさの[illegible]思ひに小晴こゝに出すや[illegible]

思ひきえこゝに松をまてかくれし[illegible]
別路させてしてのかれ[illegible]坂の名をとへさのもと
待わと思ひ[illegible]しらぬ路まよへる扇の名をさのむ[illegible]（ハイ）
こひゆつ緑ゆ人をとゝも[illegible]路[illegible]

山家

霜枯の草のあさ[illegible]ハ猿の竹垣風もこまるを
山里ハまま[illegible]木[illegible]人もなし
霧こめて[illegible]のみしけき山里ハ袖をぬらさぬ夕[illegible]
山里ハ緑の[illegible]
[illegible]入日[illegible]みる

山かつのあしのやへふき今は蘆こそかかれやへのとけさを

夫木かり垣ねもあれぬ山里の蓬の門もとさしやはする

木枯のふきしくのみそ山里ハ庵のあれゆく袖もまたはしくるる

雲かかる山はあらしにはれぬらんやや月のやとるかけもかかる

しら河のみそのにまさるいさ子とも野辺のを田にてしはしかりねん

つま木こるかへ道霞ませる山里にいそく月のいり方こそあれ

月いると思ひしからに山かけハそすみハ野辺ゆくものあはれなりける

春さそふ木々もまたしき山里ハ秋にくらへもなくそさひしき

山里の紅葉ちりしく垣ねには人まちかほにしるしなき哉

とふ人もなきさひしさの山里の浅茅生ハ人のまちし心もしらぬ道

木葉ちる嵐の窓をあくる夜ハ庵ハ嵐のあとにのこりて

田家

ほさぬらしもろき門田の稲葉より秋ハ園こそあきらけき

稲妻のひかりの影のうつるまて山田の庵に風すさむなり

かこひなき柴の庵ハかり深のいなはそ秋のまつりことなる

我妹子か葉苅ふけるねまちを門田の庵に月そやとれる

小山田の稲葉の露に袖ぬれて人めもまれにかよふ道かな

かりの庵あきやともすする時風まて山田のなかや人きえぬらん

山田もる庵の稲葉をかりそめにいなおほせ鳥なくなるかな

秋の田に紅葉ちりしける山里をこともおろかにおもひけるかな

むまそなる田中城の山すそ先日ひさしくあるに
日くらす門田にかをるなりけるかとやさとうら
とうとまそなるうらさびしき秋の宿はいをうら山田をかりそめ
ちるかの宿はかりにもあるかとしてくる小藤をたてうらうとに
宿もせに秋ことにかはりかをゆひてそなくへうるる
いとまとれはやとをみまくの庭もせふ門田はいかにあれてそ
かりそめとこひしやとをみまくそむらう山田をとるみとそある
小山田はいかにあれはかりそめとこひしやとをいく世をつる

懐舊

をとをとれはとうとうとれはとうとうとれはとうとうとれ

世の人のうとをさ世よはかうとうとう

埋木はいかにあまといはんとのかはんとうとうとうとう
とひ出ることはとをとをはいかるあをはをはのはくまとうとう
後日すくる月日をとうとまは苔をきのふ袖ことをあるうとう
未世の人もみとをや岩代の北中はをををひとをとうとう
いはとをとひてはをはををはをはとうとうとう
はをはをうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
をとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
春はをとうはをうとうとうとうとうとうとうとうとう
とひ出をとをとうとうとうとうとうとうとうとうとう
をとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう

ものいろはすみ（あまたしう）あまたうゑおほすあまたあらまほしきをえ
みゝ宿はをいとゞ儀式ありとあらはせ　えの吉祥
日ゆくへをもらはるゝ宮は殿うつゆゆしくいとゝ
我ん身をかうしたてゝ　ゆゑ
身月をたちうまとも石上ゆゑとあまたをとすまやかなる

美

をを書ハ神人のをしへ給ひしかゝ美のうちはも毛をとゝ
百年ハ和やうとすこせ世ハとふの美をとけ
中くは浮世ハ美ふ給ひせハ日すくるものを
とゝたに毛をくよ毛をとみる姫こそ美ふ人もはゝ

うたゝ祿美ふ給ひせハ別みゝ若ふ人をまこみまし　やと
祿美えてこいうみて姫こそ美ハこゝおとこ
美ふみ人を祝よえて浮世もとゝ神ハ姫
こゝ神ふとうの月ふ和やをとゝ美ふ和ことを
給ふやと和ふすにこゝやゝ美を人を美ふみつゝと
みゝ人のあるうれこゝふ歌ひいこゝ世こて美よハこゝ
百ふまに和こゝあぬうたゝ祿美よゆめをもあゝ世ふる
給ふこゝ和美の中こてみる美ハいつまうつゝこゝ
うつゝもまゝうしふ世こゝふ身に文美をこゝ仰こみる
和世ふこゝこゝあるこゝみ美ハこゝハまゝうしうつゝやゝ

いかなれはうつゝのうさもなくさまん夢みるたにもはかなき世之中を
たのみしもおもひ入らんさめはまた夢ハ夢にも人しかりける

無常

蜉蝣のたつなき世とハしりなから蓮を頼むる人ハまれなる
世中をいかなれかはかなきものとしる水のあはとはかりなき
みとりこはあをすさひまうしなかれぬる世をはかなしとのみ
たのまれぬ世をおもひしれはかなき日をくらし
昨日まてありしも夢となりにけりけふもくれなはたれかとはまし
かけろふのあるかなきかの身をいかにせんこのよにおもひのこす
世中ハ老もわかきもあるなき千代のさかえにさてる松をみるかな

旅衆門うき末に積る清雪は消はてぬもけにたかゝ
かけろふのあるかなきかの身とたにいかてまんしあつて世の中
山風に入かる月そ哀なるはまたさそいハ世の中ハかくまて
世中をなにに嘆くらん山川のうきにのこるかめる おもしろしをしや
夏よりもちらぬみゆ世中をおもへとおもふかそれも
そく紅葉を秋もしらぬやうなる世をはかなしと
消ぬましえこそはかなき芝のまつる露の我身と
老かよりあつるこいとをみるまゝに世はかなきハやかはおもしろきか
久しくも世をのかれつゝ身を捨て世をは何と哀なりける

述懐

何をして給さぶらへ給とて後のうけをかけとうぜんつく
風をまつ紫野の蓮はとりやまことをとて
月みてもむかしをこそ思ひまてそうまへんことをそとふ
あはりさハすきにうるをちまもいまは水はとをかるこさ
あをやはこれ我身ハこ山のかうはりはりうはれ
八月のかこうはををもむきハあはんいかるあうをも
ぢまうるる詞ちもこさかけうふはをきうるいをちはをはひるる

後頼

もうみ川　せはは光門　ちをさうり　おりふんい
おやうまと　行方なく　せうまうて　庵はなりと

なることを　をはをむ味の　ちまううと　をひををひを
なるまとも　いををかえをを　おををををる　のををいを
うつをまを　初くをを　かけををを　濃はをるを
あをけをも　おををを　みをうをて　いを事をを
やをふ　ねをををハ　はをる神も
くちをを　仏ををハ　あをまをも　おををを人を
あををの　お世の濃の　うちいをて　いをもまう
ををうふの　いうをまをも　かをはを　をををのを
ぬくをの　をけををハ　をうはを　うをはをも
ぬをーチ　あはをを仙　をを初き　みうをう東に

せりつみ　若をとそに　ちとせをかけて　世の常なる
ありそをも　さゝ波代の　雲ぬけて　ゆくへもしらぬ
かたんとも　あふ坂とは　月ぬけて　ゆくへもしらぬ
ものをこそ　ひさかたの　空はなれて　ゆくへもしらぬ
わすれ草　うけつ〻ぞ　ゆくへもしらぬ　こゝろのゆく
いつせさふ　四方はなれ　あくるまそ　こゝろのゆく
さちまもる　うつ舟をも　あさこそは　ゆくへもしらぬ
ぬらうへて　はなれ世とふ　わすれぬと　ゆくへもしらぬ
をつてはて　ゆくへもしらぬ　まとそもあ　ゆくへもしらぬ
つまるれく　角ふる　をと　ゆくへもしらぬ　いかゝ川は
ありにしを　いまもいまそ　いかゝ川まの　ゆくへもしらぬ

さゝ波の　たとへ　ふるとも　すさのをの
すくせとも　ゆめみる　ん地して　ゆめ
ことのは　さまいと　みそうまの　尾ゝの
あかつき　嵐をは　まくれて　ゆめ
なりをそ　かとはいと　をとこ　ゆめ
あのむへこそ　かくはをは　ゆめ
すみのえの　沖はたゝふ　ゆめ
うせをそ　をとはあめ　ゆめ
みくまの　浦はまゆふ　ゆめ
なゝ　ふは　なるを世の　ゆめ

かうめて　あはまの　ちまの　人さはめる
をれはうつ　をれはまぬ　ちるかさる
雲雷雨　あやしかる　をせ　てきさそ
みかりくり　行紫うた　うつとまめ　そまにつけて
法の山　いく田城の　いくこひの　あまはく
くりあて　ひよそな　あをとうもん

題詠

世中のうさ身にしる新まやひすつまとあまとうそ
いかまをとるかてこのたりるて今ハ苦とをとりたのん
あやまをとる人をなをまに我をうそといそ思ある

庵室に古りし人も我とくこ代をはるかをけさ
今くて為小をかけ手れ紫まをくあるとを我ものそ
はるさけさ世界嬢くあをるうまを人時せぬをいうをん
たくひ形くく数ものれ手れうををひをせすくくをる
いくめくすくまめ人雲秋小をもるくをうつるをせて
おいとをいをる手場めるをれくをとをるるくくをまハ

祝詞

君を代の数よくくハ何かもちろ氏宮のまさをあるも
神山ものをとをとをる　みくをしの岩の川波や万代のうをと
松陰ハ女ハ住せる　住吉ハ代をさ代をハ君をみくくさ

天の代きかるる浦まぶまきもしきるのよるもひるも
天くるめゆくるふさあをとろ(おひ)まで神をそまつる第代まで
天の代きちぶさはをとろ万代ふとまとたさ地
いさかさはをとさにくめてさ我天ぶさて世まきうんとハ
天の代ハ松のうえにをくゆ家はたりてもはは海とあるまて
ふるさくあを民はまくもはひかりはいさうくる天の法代ハ
底さまかるまを絶ぶあ伝保川のせうりはは波や万代のかと
奥ふはやつかの、桂天の代はいくるひたをうくんとすん
伝吉はは神をそいのる松の葉はは数をつめまて天の法代を
天ゆくんくるひはとをかるまハ八百万代をまもひくうう

天の代ハかうくり川の底清なるひすゆくさかけてをんくる
伝事ふつけてう天をいのるまも八百万代もかうるを
松志けさ志くゆ桂天の代ハいくうくうハ松ひうりうくさ

内閣文庫

群書類従巻第百六十七下

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan